

都市工学科・都市工学専攻 この一年

都市工学科専攻長 清田 勝

改修工事が始まる前、理工学部3号館（都市工学科南棟）は、廊下は薄暗く、学生の休憩や学習のためのスペースはまったく確保されておらず、ほとんどが研究室や教員実験室、演習室に割り当てられていました。しかし、改修後建物は一変しました。各階にはコミュニケーションルームや自学自習室、リフレッシュルームなどが整備され、各部屋のドアには外から内部が見えるようにスリットのガラスがはめ込まれ、廊下は以前より明るくなりました。この効果は顕著に現れ、これまで南棟にはほとんど来なかった学部学生が集まるようになり、個人単位の学習（宿題や予習・復習）だけでなく、グループ単位で宿題や課題に取り組む姿が頻繁に見られるようになりました。研究室が少なくなるという理由で、はじめは教員には不評でしたが、結果的には今回の改修計画案は間違っていなかったというプラスの評価に変わりました。これまでは研究環境だけに目が行き、学生の学習や休憩のためのスペースを確保するというようなことはほとんど考慮されることはありませんでした。

今年度は、都市基盤工学分野に若くて優秀な新任の内田先生を迎えることができました。研究実績等から見て、准教授相当だと思われませんが、空きポストの関係上助教での採用になりました。貴重な人材が流失しないような対策を早急に講じる必要があります。一方、長年に渡って土木工学科、建設系学科および都市工学科の発展にご尽力（特に、測定の教育・実習にご貢献）いただいた古賀勝喜先生が今年度一杯で退職されることになりました。さらに、8年間、学生の教育や研究に熱心に取り組んでこられた平川先生が退職し、前橋工科大学の准教授として赴任されることになりました。貴重な人材を失う原因となったのは、将来の人事に関する青写真を示せなかったことだと考えています。まずは、若手の教員が安心して研究や教育に打ちこめる環境を造ることが必要であると考えます。

教育改革の必要性が言われて久しいですが、そのためにはJABEE認定を受けることが必要不可欠であると考え、多くの大学（主に学科単位）が認定を目指して動き出しました。JABEE認定が認められれば、技術者育成のために求められる所定の品質を保証する大学教育を適切に実施していることが、第三者機関により評価されたこととなります。しかしながら、JABEE認定には膨大な申請資料を作成しなければなりません。また、JABEEの認定を継続するためには、定期的に審査を受けることが必要であり、その準備のために多くの時間を割かなければならず、肝心の教育の部分に十分な時間を当てることができず、あまり教育効果が上がっていないと聞いています（本学循環物質化学科、熊本大学大学院自然科学研究科社会科学専攻：中間審査まで対応、それ以降は対応しない方向）。

教育改革が必要なことは疑いのない事実です。しかしながら、『JABEE 認定を受ける』ことが、教育改革のすべてではありません。PDCA でも十分対応できると考えています。資格などの体裁ばかりに目が行って実が伴っていません。ラーニングポートフォリオもまったく同じことが言えます。学生と面談する時間をできるだけ確保することが重要なのに、パソコンに入力しなければならないので、話す時間が短くなるし、話しながら入力するので話に集中できなくなるなどの弊害が生じます。問題がありそうだったら、書きとめてファイルに綴じておけば済む話を時間をかけてパソコンに入力する必要が何処にあるのでしょうか。このような資料を誰が読むのでしょうか。このように意味のないことに教員はどれだけ時間を浪費させられているのでしょうか、この時間を教育や研究に回すべきではないのでしょうか。

ついでに人事に関してもう一つ言わせてもらえれば、准教授で公募した場合、教育年数が3年未満の候補者が選ばれた場合には、(暗黙のルールで) 講師で採用することになっています。教育年数が3年を超えた時点で昇格させるのが自然だと考えられます。なぜ、このような人事を公募にしなければならないのでしょうか。この人事をするのに専攻長をはじめ多くの人が膨大な時間を割くことにもなるし、応募してくる候補者にもはなはだ失礼であると思われれます。もう少し柔軟に対応できないのでしょうか？

(2012年3月)